

幹事長日誌

(平成22年1月1日～12月31日)

鎌田英明

- 1月1日(金) : 快晴 元旦
民主党政権で迎える初めてのお正月。
医療の世界を含め、日本はどこへ向かっていくのか、元旦早々の時事番組を見ていても結論は見えてこない。
とりあえず、神皮だけでも未来に向けて始動。
- 1月16日(土) : 晴れ、於/横浜ベイシェラトンホテル
常任幹事会
今年も神皮の活動が始まった。今年は、5月の日臨皮総会に「神皮企画シンポジウム」の時間をもらうことになり、その計画や例会の最終チェックなど、年始から熱心な討議が行われた。
- 1月21日(木) : 晴れ、於/ホテルキャメロットジャパン
第5回神奈川フットケア研究会(共催:マルホ株式会社)
「足の病変を読む」群馬大学皮膚科 永井 弥生
「難治性潰瘍治療の実際—消毒から手術まで—」埼玉医科大学形成外科教授 市岡 滋
永井先生は、石川治先生のご都合がつかず、ピンチヒッターでおいでいただいた。ご本人は謙遜されておられたが立派に名代を務められた。
市岡先生は、豊富な症例と見事な手術例の供覧と、糖尿病を主とした潰瘍治療における皮膚科医の悩みに応えるようなご講演であった。164名参加。
- 1月28日(木) : 晴れ、於/横浜ベイシェラトンホテル
編集委員会
神皮17号発刊にむけての編集委員会。多士済々、執筆者選びも余り苦勞せずにすすむ。ただ、ここでもメーカーからの寄付集めが困難になりつつあるとか……。
- 2月2～7日(火～日) 第14回感染症サーベイランス施行
- 2月11日(木・祝) 神奈川県医師会創立62周年記念式典の場で、副幹事長増田智栄子先生が、神奈川県医師会の褒賞規則により、国保審査委員在任10年の感謝状と記念品を授与される。
10年と一口に言うが、大変なことである。これからも益々がんばっていただき、医会の健保伝達の中心的存在として続けていただきたいものだ。
同式典では長寿会員の表彰もあり、新関寛二先生が80歳、中野政男先生が90歳で表彰された。
- 2月16日(火) : 曇り、於/県医療会館
日医生涯教育新システム説明会
日医の生涯教育制度の申請方法が変更になるとのことで、医会を代表して参加。
新制度が行われることになった場合、企画委員会段階でのプログラム作りにも影響があり
そうな内容となっており、今後コード設定など手間が大変そうである。
- 2月20・21日(土・日) 晴れ、於/京王プラザホテル
第72回日本皮膚科学会東京支部総会

神奈川からも多数の演題が出され、また多くの先生が座長を務められた。

来年は勝岡教授の北里大が担当だ。

2月25日(木) : 於/ホテルキャメロットジャパン

学術・サーベイランス委員会

現在の感染症サーベイランスをどのようにしていくかを中心に討論。

米元委員長もいろいろお考えをお持ちで、今後の発展に期待が持てる。

3月3日(水) : 晴れ、於/横浜ロイヤルパークホテル

健保委員会

例会の健保コーナーの準備。

22年度診療報酬改定に関する事項など盛り沢山。

3月7日(日) : 雨、於/関内新井ホール

第132回神奈川県皮膚科医会例会(共催:マルホ株式会社)

テーマ「膠原病～治療を中心に～」

「膠原病 最近の検査と治療」

北里大学医学部 膠原病・感染内科学 専任講師 田中 住明

「膠原病 皮膚から判断する治療指針」

聖路加国際病院 皮膚科部長 衛藤 光

ミニレク「尋常性痤瘡治療ガイドラインにおける内服抗菌薬の位置づけ」

東京女子医科大学 皮膚科学教室 准教授 林 伸和

天野隆文担当幹事の心配もどこ吹く風といった感じで、肌寒い雨降りという天候にも関わらず多数の参加者で、普段の例会では見かけない顔も多かった。

膠原病は皮膚科医が診ましょ。衛藤先生の熱意が伝わるご講演でした。159名参加。

3月8日(月) : 晴れ

県医学術大堀様へ例会等開催の報告。

3月10日(水) : 晴れ、於/ホテルキャメロットジャパン

第133回神奈川県皮膚科医会学術講演会準備会(神皮企画委員会、共催:鳥居薬品株式会社)

終わったばかりの132回の反省では、膠原病という演題にも関わらず、若手のドクターの出席が少なかったことがまた挙げられた。会員の勧誘もそうだが、最近の若者の心を捉えることは、ロートルになってきた我々では難しいのだろうか。

次回、133回はいわば他流試合になりそうで、人集めに一工夫が必要か。

3月25日(木) : 雨、於/ホテルキャメロットジャパン

神奈川県皮膚科医会「春の勉強会」(神皮産業医委員会、共催:サノフィ・アベンティス株式会社)

昨年から産業医委員会の勉強会を更にグレードアップし、今年は日野治子先生のアドバイスもあり、精神科領域の演題を用意した。

「皮膚は興奮しやすい器官である—皮膚は語る心の秘密—」 クリニックおぐら 小倉 清
寒い1月から春3月に日程を動かすも、この日はあいにくの冷たい雨の一日となったが、思った以上の参加者に、中心となって準備してくれた宋副委員長も安堵の表情だった。もう来年の計画も練っている様子。40名参加。

4月15日(木) : 晴れ、於/横浜ベイシェラトンホテル

会計:会務監査

滝沢、杉本両監事にご出席いただき、監査を受ける。

会計のみならず、医会運営に関しても貴重なご示唆をいただく。有意義な監査であった。

4月16～18日（金～日） 於／大阪国際会議場

第109回日本皮膚科学会総会

昨年の福岡に続き、総会としては久しぶりの大阪開催。

受付での集金が機械化されたり、写真入り会員証の導入に伴う写真撮影があったり、まず受付でまごついてしまう。

参加者数が過去最高だったとか、会場移動のエレベータも満員状態。懇親会場の広さも半端ではなかったが、それにも増しての人の数。大阪の街やデパートでは行列をあちこちで見かけたが、ここでも「たこ焼き」に長い行列ができていた。

4月22日（木）：雨、於／ホテルキャメロットジャパン

神奈川県皮膚科医会学術講演会（共催：日本バーリンガーインゲルハイム株式会社）

「アレジオンの皮膚疾患に対する有効性 ～抗ヒスタミン薬の新たな可能性～

うるおい皮膚科院長 豊田 雅彦

「レストレスレッグス症候群について」

独立行政法人国立病院機構相模原病院 神経内科医長 長谷川 一子

最近話題となっている「レストレスレッグス症候群」、「むずむず脚症候群」の我々の認識はどうやら間違いのようで、「足を動かしたくなる症候群」とか…、難しい。81名参加。

4月24日（土）：晴れ、於／田中屋（東海道神奈川宿）

第26回日臨皮総会・神皮担当シンポジウム（マルホ株式会社共催）打ち合わせ会

「足も皮膚科医が診る」をテーマとして日臨皮総会で行われるシンポジウムの構成について打ち合わせを行う。大げさかもしれないが、今後皮膚科医がアイデンティティーを保ち続けるひとつの考え方を示せればと思う。

打ち合わせ後に、田中屋の名物女将による神奈川宿と田中屋の歴史についてレクチャーを受ける。

5月8日（土）：晴れ、於／横浜ベイシェラトンホテル

常任幹事会

133回例会の最終チェック。例年のごとく総会のための事業報告・決算、事業計画・予算案のチェックに加え、神皮の将来をみすえた新年度人事構想に関し、淡々とした中にも熱い意見が交わされた。転換期の生みの苦しみか。気がつけば2時間。常任幹事の皆様、お疲れ様です。

5月13日（木）：晴れ、於／横浜ベイシェラトンホテル

編集委員会

今年も「神皮17号」発刊に向けて最後の調整。例年に比して原稿の集まりが良く、ほぼ完成に近いゲラ刷りを前にやることも少なく、いつの間にか日ごろの各人の診療に関して意見が交わされた。たまにはこういうフリートークもいいものだ。

5月15日（土）：晴れ、於／ホテルキャメロットジャパン

第13回 Joy Derma Club

「乾癬治療 最近の話題」 国立病院機構相模原病院皮膚科医長 朝比奈 昭彦先生

「分子標的薬の副作用について」 横浜市立市民病院皮膚科部長 毛利 忍先生

いつものごとく盛り上がったようだ。参加者38名。

5月29・30日（土・日）曇り、於／ホテルグランパシフィック LE DAIBA（東京）

第26回日本臨床皮膚科医会総会

今年は東京都主催で、お台場でもあり、多数の参加であった。出展を予定していた一般演題がなかったため、大路会頭と栗原神皮会長とのトップ会談で「神皮企画セミナー」の時

間をいただき、神皮のアピールをすることができた。

テーマ：「足も皮膚科医が診る」（司会：鎌田英明、増田智栄子）

いま、なぜ「足」なのか？ 栗原誠一会長

「足の健康チェック」活動報告 山田裕道（国際親善病院）

「外来でできるフットケアのコツ」 野村有子（横浜市）

「足を診れば分かる全身疾患」 末木博彦（昭和大藤が丘）

の各演者による講演が行われ、好評を博した。参加者は150名で、会場がほぼ満杯であった。夜には、学会時恒例となった「神皮ナイト」が、金丸副会長のお骨折りで、屋形船貸しきりで行われ、東京湾の夜景を満喫した。

6月12日（土）：晴れ、於／横浜エクセルホテル東急

第59回神奈川医真菌研究会（共催：ヤンセンファーマ株式会社）

今年から医真菌研究会に、神奈川県皮膚科医会も共催することになり初の集まりがもたれた。時間超過になるほどの活発な討論も交わされ、おおいに盛り上がった。

6月23日（水）：曇り、於／スカイビル

広報委員会

11月3日の「ひふの日」イベントに向けた打ち合わせの会。

形式も定着し、相談もスムーズに進む。

6月30日（水）：曇り、於／ロイヤルパークホテル

健保委員会

例会Q&A、健保諸問題について話し合う。

医者者の倫理と常識が試されているような、あからさまに利益を追求していると思えないレセプトの問題が出るたびに、襟を正さねばといつも考えさせられる。

7月4日（日）：曇り、於／関内新井ホール

第133回神奈川県皮膚科医会例会（共催：鳥居薬品株式会社）

テーマ「ヒトの皮膚、動物の皮膚」

「皮膚が隔てる外と内：皮膚バリア機構の細胞生物学」

慶應義塾大学医学部皮膚科／総合医科学研究センター特別研究講師 久保 亮治

「動物の皮膚、ゾウについて」 アジア産野生生物研究センター代表 堀 浩

「脊椎動物の上陸と形態進化」東京慈恵会医科大学解剖学教室教授 岡部 正隆

渡辺知雄担当幹事の長年温めた「夢」が伝わってくるような例会だった。企画当初は種々異論も出たテーマではあったが、時には臨床を離れ、他流試合に出るのも良いものだ。

129名参加。

7月8日（木）：曇り、於／エクセルホテル東急

第131回神奈川県皮膚科医会学術講演会準備会（神皮企画委員会、日本ベーリンガーインゲルハイム株式会社共催）

終わったばかりの133回例会の反省。ならびに次回134回例会の最終チェック、さらに135回以降の検討、いつもながら活発な討議が行われて、また次の例会が形作られていく。神奈川県皮膚科医会のひとつの源である。

7月26日（月）～7月31日（土）

第15回感染症サーベイランス施行

7月31日（土）：晴れ、於／熱海

第6回環相模湾皮膚の会

隣県静岡の皮膚科医会の先生方との交流の会。今年も双方10名弱の参加ではあったが、和

やかな交流の機会が持てた。

8月5日(木) : 快晴・猛暑、於／ホテルニューグランド

臨時常任幹事会

新任常任幹事を迎え、顔合わせ的な意味も含めた臨時の常任幹事会。

栗原会長のこれまでの医会への想い、これからの若手への期待と助言が熱く語られ、新たな神皮への橋渡しを実感させる会となった。

9月1日(水) : 快晴・猛暑

9月の声を聞くというのに、今年の異常な暑さは未だに猛威を奮い、各地でお年寄りを中心に熱中症で亡くなる方が続出している由。やはり「地球温暖化」なのか、最近、朝の散歩でもミンミン蝉やアブラ蝉の声に混じって、クマ蝉の声の割合が増えたように思う。いづれ、横浜の夏も京都の夏のようになるのだろうか。

さて、暑さの中、在宅勉強会から後半戦の始まりだ。

9月9日(木) : 晴れ、於／ホテルキャメロットジャパン

第19回在宅医療勉強会(共催：興和創薬株式会社)

「不適切な湿潤療法による被害・いわゆる“ラップ療法”の功罪」

土浦協同病院 皮膚科科長 盛山 吉弘

「地域医療連携における在宅チーム医療と多職種協働

～開業医のチームが可能にする高度在宅医療～」

尾道市医師会会長・片山医院院長 片山 壽

過去最高となる入場者に、共催の興和さんも嬉しい悲鳴。

しかし、後方の席ではスライドが見にくいという苦情も聞かれ、次回以降、会場設定も十分に検討する必要性を痛感させられた会でもあった。227名参加。

10月16日(土) : 晴れ、於／横浜ベイシェラトンホテル

常任幹事会

新体制最初の常任幹事の集まり。

若返りの予感。

医会活動も順調に進められている。

10月20日(水) : 曇り、於／スカイビル

ひふの日 打ち合わせ会(広報委員会)

間近に迫ったひふの日イベントの最終打ち合わせ会。

昨年のノウハウが生かされ、小林先生も余裕が出てきた感触。

がんばりましょう。

10月30日(土) : 台風、於／横浜ベイシェラトンホテル

神皮秋の勉強会(共催：田辺三菱製薬株式会社)

「医療安全 Up-to-date」

三重大学医学部付属病院 医療安全・感染管理部 准教授・副部長 兼見 敏浩

「アトピー性皮膚炎の考え方 Up To Date 一病態の一元的理解を目指して」

東京大学大学院医学系研究科皮膚科学 教授 佐藤伸一

大分違和感なく定着してきているメーカー共催の「勉強会」。昨年に引き続き、東大皮膚科 佐藤教授をお招きして開催。相変わらずきちんと整理されたご講演内容は、さすが。

また、例会では取り上げられることのない医療安全の話も参考になった。

惜しむらくは、数十年ぶりという10月末の台風接近という予想外の状況に、当初予定の100名の参加とはいかなかったが、それでも55名の参加をいただく。

- 11月3日（水、祝） 晴れ、於／横浜情報文化センター 情文ホール
「ひふの日」記念イベント
今年のひふの日イベントも、小林誠一郎先生を中心に広報委員の先生方やボランティア参加の先生方のお陰で、成功裏に無事終了。もっと時間をとっていいのではないかとの意見も出るほどだった。
打ち上げ会もおおいに盛り上がったとのこと。ご苦勞様でした。
- 11月20日（土） : 於／パンパシフィックホテル
第14回 Joy Derma Club
テーマ「髪と頭皮」
担当幹事は大沼すみ先生と河野真純先生。
参加者も過去最多と益々「女医力」アップの由。60名参加。
- 12月1日（水） : 晴れ、於／横浜ベイシェラトンホテル
健保委員会
例会Q & A、健保コーナーの内容について打ち合わせ。
保険点数表だけでは見えてこない解釈について討議。
- 12月5日（日） 快晴、於／関内新井ホール
第134回神奈川県皮膚科医会例会（共催：日本ベーリンガーインゲルハイム株式会社）
テーマ「薬疹」
「多彩な薬疹の世界 一稀な薬疹、新しい薬疹」
横浜市立大学医学部附属病院皮膚科教授 相原 道子
「薬剤性過敏症候群（DIHS）」愛媛大学医学部皮膚科教授 橋本 公二
ミニレク「レストレスレッグス症候群（むずむず脚症候群）」
かわしま神経内科クリニック院長 川嶋 乃里子
松井潔担当幹事の心配をよそに、会の開始時からの大盛況。
やはり、「薬疹」は皮膚科医にとって重要な疾患。会員諸氏が自ら足を運ぼうと思わせる例会作りを今後も心がけていかなければならないと改めて思う。
懇親会で触れた橋本教授の柔和さがまた印象的でした。135名参加。
- 12月8日（水） : 晴れ、於／エクセル東急
第135回神奈川県皮膚科医会学術講演会準備会（神皮企画委員会、マルホ株式会社共催）
例会も終わったばかりというのに、早速次の例会の準備作業に入る。
いつも思うが、これが神皮の伝統に裏打ちされた底力ということなのだろう。
- 12月31日（金） : 晴れ
早くも今年も大晦日を迎える。
今年は、人事面の若返りなど、少なからぬ動きのあった年だった。
どんな組織もマンネリは停滞を招く。己も含め、上手な若手への委譲が今の幹部の取るべき責任であろう。
鐘の音百八つじゃ足りない煩悩を振り払いながら、今年も浴びるほど飲んだ「命の水」で今年も締める。
来年も神皮にとって良い年になりますように。

委員会報告

学術・サーベイランス委員会だより

米元康蔵

当医会の学術・サーベイランス委員会の事業である感染症サーベイは、第16回を数えるに至りました。これも定点としてその実施を快く引き受けて下さっている先生方のおかげであり、ここに改めてお礼申し上げます。また今年度から、横須賀地区では黒澤傳枝先生が金丸哲山先生の後任を引き受けて下さっています。

委員会としては今後も継続的に感染症サーベイを行っていく上で、定点の再編を検討しつつ更なるデータ集積をして行く予定であります。また、多くの会員に参加してもらえよう新たな企画として、掌蹠の尋常性疣贅治療に関するアンケート調査を実施すべくその具体的内容について煮詰めているところです。今年中の実施を考えておりますので、その折には神皮会員の先生方のご協力を何卒よろしくお願いいたします。

平成22年度の事業報告

平成22年 7月26日～7月31日 第15回感染症サーベイランス

平成23年 1月31日～2月5日 第16回感染症サーベイランス

平成23年 3月12日 学術・サーベイランス委員会並びに神奈川県感染性皮膚疾患講演会
「難治性疣贅の治療」

演者：江川清文（東京慈恵会医科大学）

委員会報告

Joy Derma Clubだより

高橋さなみ、大沼すみ

第13回 Joy Derma Club

日 時：平成22年5月15日(土) 18:30～21:30
場 所：パンパシフィック横浜ベイホテル東急
共 催：協和発酵キリン株式会社
参 加 者：38名
担当幹事：河原由恵、高橋さなみ

プログラム

1. 「乾癬 治療最新の話題」独立行政法人国立病院機構相模原病院 皮膚科医長 朝比奈昭彦先生

今年いよいよ乾癬治療に生物学的製剤であるレミケードとヒュミラが承認されました。生物学的製剤とは遺伝子工学的手法を応用し生体のシステムで作られ特定の生物学的作用を有するものであり、ピンポイントで働きかつ肝腎の代謝酵素で分解されないため臓器障害がある人にも使えるという利点があります。乾癬の治療戦略としてまず注目されたターゲットはT細胞、次は各種サイトカインでしたが、どちらも期待された治療効果がえられないまま最終的に承認された薬はありませんでした。しかし次に登場した抗TNF α 抗体薬は従来の治療で効果が乏しかった乾癬患者さんにとって非常に期待できる薬剤で、患者会の署名活動が承認を早めることになった…との経緯にあらためて重症乾癬患者さんの苦労を思い、新薬開発の重要性を身にしみて感じました。現在承認されているふたつの抗TNF α 薬の特長、実際の投与方法、投与により起こりえるアレルギーや感染症のリスク、逆説的副作用、中和抗体の出現による効果減弱などの注意点とその対策について、具体的な例をあげながら詳しく教えて頂きました。開業医では手をだせない治療法ではありますが、臨床医として患者さんのために知っておかなくてはならない知識を身につけることができ非常に有意義な講演でした。

2. 「分子標的薬の副作用について」横浜市立市民病院 皮膚科部長 毛利忍先生

生物学的製剤である抗体医薬品のうちすでに承認され使用されている抗腫瘍薬や免疫調節薬でみられる皮膚障害について、横浜市民病院における豊富な症例をスライドで呈示しながら解説して頂きました。例えば投与2か月で爪囲炎がかなりの確率で生じることがわかっていますが、これらの皮膚障害の重症化を抑えるために発症する前から皮膚科医が介入し予防するためのケアを指導するなど重要であることを教えて頂きました。

3. 情報交換会

和洋中がすべてそろったとてもおいしく上品なお食事やワイン、デザートをいただきつつ黒一点の朝比奈先生を囲む輪が次々にでき、とてもたのしい歓談のひとつでした。

(文責：高橋さなみ)

第14回 Joy Derma Club

日時：平成22年11月20日（土） 18：00～21：00

場所：パンパシフィック横浜ベイホテル東急 B2F クイーンズグランドボールルーム

共催：神奈川県皮膚科医会 JDC、株式会社ポーラファルマ

参加者：神奈川県皮膚科医会会員の女医53名、非会員7名

テーマ 「髪と頭皮」

担当幹事：大沼すみ、河野真純

プログラム

1. 製品紹介 ポーラファルマ学術

2. 「女性の脱毛症 脱毛症外来の診療風景と男性型脱毛症治療ガイドラインについて」

植木理恵先生（順天堂東京江東高齢者医療センター 皮膚科准教授）

女性のびまん性脱毛につき、1. 男性型脱毛（FAGA） 2. 休止期脱毛 3. 加齢変化 に分けて、問診、診察から診断、検査、治療、生活指導について大変詳しく教えていただきました。「積極的傾聴と共感的態度」が大切であること、診察の際にはまず「髪に触っていいですか？」と聞くことなど、患者さんを思いやる気持ちにあふれた診察の仕方を教えていただきました。

3. 「頭皮・頭髪疾患の鑑別とケアのポイント」

坪井良治先生（東京医科大学 皮膚科主任教授）

乳児期、幼児期、学童期以降の脱毛症につき、幅広く教えてくださいました。円形脱毛症、トリコチロミア、癬痕性脱毛、休止期脱毛、AGA型脱毛などの診断、鑑別のポイント、検査、治療について詳しく教えて

いただきました。頭皮のケアについては、先生の私見をまじえながら、実際の患者さんの指導に役立つお話をしてくださいました。

◎第15回は平成23年5月14日に「爪の病気・爪のケア」をテーマにセミナーを開催予定です。たくさんの女医の皆様の参加をお待ちしております。

(文責：大沼すみ)

委員会報告

在宅医療委員会だより

袋 秀平、山田裕道

第19回神奈川県皮膚科医会在宅医療勉強会

日時：平成22年9月9日（木）19：00～

会場：ホテルキャメロットジャパン

参加者：医師55名、コメディカル172名：計227名

共催：興和創薬株式会社

講演テーマならびに講師：「不適切な湿潤療法による被害・いわゆる“ラップ療法”の功罪」

土浦協同病院皮膚科科長 盛山吉弘先生

「地域医療連携における在宅チーム医療と多職種協働

～開業医のチームが可能にする高度在宅医療～」

尾道市医師会会長・片山医院院長 片山 壽先生

「不適切な湿潤療法による被害・いわゆる“ラップ療法”の功罪」土浦協同病院皮膚科科長 盛山吉弘先生

本邦では、moist wound healingの概念に基づき、2000年頃より、食品保存用のラップを用いて簡便に湿潤環境を作り出す、いわゆる“ラップ療法”が広く行われるようになっていく。また最近では、台所用穴あきポリエチレン袋と紙おむつを利用し、過剰な滲出液のコントロールを考慮した、ラップ療法の変法も広く施行されている。

“ラップ療法”は、医療材料でないものを使用するという問題点は残るが、創傷管理の正しい知識をもった医療従事者が施行すれば、安価で有用な治療法の一つであろう。しかし、これらは、その簡便性、有用性から、どんな傷も簡単に治る万能な治療法と誤解している医療従事者も多く、その陰に被害者が生まれていることも忘れてはならない事実である。

もともと、“ラップ療法”は、人手もなく、経済的にも苦しい、病院以外の施設や在宅などで、いかに安価で効率よく、創傷（褥瘡）を治すかという善意のもとで、開発され広まった治療法である。その点で、営利を目的とするアトピービジネスとは趣を異にする。ラップ療法の波及には、功・罪の両側面があり、様々な議論を呼んできた。褥瘡の治療において、多くの病院では日本褥瘡学会ガイドラインに基づいた治療法が基本とされているが、“ラップ療法”はガイドラインに記載されていないため、実際に褥瘡の治療にあたる医療スタッ

フの間に一部混乱が生じている。このような背景から、2010年3月、日本褥瘡学会理事会の見解として以下が示された。

『褥瘡の治療にあたっては医療用として認可された創傷被覆材の使用が望ましい。非医療用材料を用いた、いわゆる「ラップ療法」は、医療用として認可された創傷被覆材の継続使用が困難な在宅などの療養環境において使用することを考慮してもよい。ただし、褥瘡の治療について十分な知識と経験を持った医師の責任のもとで、患者・家族に十分な説明をして同意を得たうえで実施すべきである。』

現在、「ラップ療法」に関しては多くの著書があり、インターネット上でも多くの記事が掲載されている。かつて「ラップ療法」万能説を唱えていた医療者のほとんどは、その欠点を見直し、ラップ療法の推奨記事の中で、適応症例の選択、壊死組織の除去の必要性、感染に注意することを記載するようになってきている。しかし、一部にまだまだ万能な治療法として紹介している記事も見られるのが現状である。

最近では、テレビ、新聞などでも頻繁に取り上げられるようになってきているが、特にテレビなどの短時間の一般市民向けの情報では、適応を誤った際の危険性にはほとんど触れず、簡便性・有用性のみが強調される傾向が見られる。これを一般市民が鵜呑みにし、医師や看護師などが介在せず、自分たちの判断のみでラップ療法を行った場合、本報告のような症例が、今後ますます増えていくことが危惧される。

ラップ療法の是非については、今に始まった議論ではないが、一般市民に浸透しつつある今、正しい知識を積極的に啓蒙すべき時期にきていると考える。

「地域医療連携における在宅チーム医療と多職種協働～開業医のチームが可能にする高度在宅医療～」

尾道市医師会 会長 片山 壽先生（岡山大学医学部臨床教授・片山医院）

世界一の高齢国家であるわが国は近未来に2人に1人はがんに罹患し3人に1人は亡くなる時代に突入し、2040年には年間総死亡者数が160万人に達するという推計である。

ここで、「エンド・オブ・ライフ・ケア」の概念整備に向けて、国としての明らかな指針を政策として示す必要があるが、これに対応する地域医療には在宅医療の標準化と多職種協働（multidisciplinary care）を意識したチーム医療が求められる。

尾道市の高齢化率は30%を超えて、全国を15年ほど先行する地域である。患者本位の地域医療連携で多様な疾病に対応するために、急性期・回復期・生活期が医療と介護の総合化を含めオーダーメイドで稼動するシステム理論が尾道市医師会方式である。実態は患者が信頼する開業医の在宅主治医機能と急性期病院とのチーム医療であり、在宅緩和ケアによる自宅での「豊かな死」は最重要の領域であり、地域医療の完成度の指標となるべきものである。

終末期でなく、人生の終生期に豊かなケア（end of life care）が国民に提供できる地域ごとの医療・看護・介護体制が必要である。世界中でいま「豊かな死」に対する議論が高まってきているが、結局、望むところは自宅での安楽な最期であるからには、がんになっても在宅緩和ケアという選択肢を明確に提示できることが、地域がん拠点病院、がん診療に関わる全ての病院に必要である。

一方で、在宅主治医として患者さんに最期を託された医師が、地域医療連携によりチーム医療を駆使しながら在宅緩和ケアを行うことができなければ、その人は望んだ自宅に戻れないことになる。

ここで在宅医療の本質が国民の安心を支えるレベルに標準化できることで、今後の超高齢国家に「豊かな死」を提供できる医療モデルへの転換となる。

第5回神奈川フットケア研究会報告

日時：平成22年1月21日（木）19：00～21：00

会場：ホテルキャメロットジャパン 5F ジュビリー I・II

参加者：会員80名、コメディカル84名 合計164名

共 催：マルホ（株）

講演テーマならびに講師：「足の病変を読む」群馬大学医学部皮膚科准教授 永井弥生先生

「難治性潰瘍治療の実際—消毒から手術まで—」

埼玉医科大学形成外科教授 市岡 滋先生

足の疾患はまずは皮膚科医が診る、必要に応じて他科へ依頼する、そういうコンセプトを皮膚科医も患者さんも共有すべきと考え、神奈川県皮膚科医会では平成18年に本研究会を立ち上げ、皮膚科医とコメディカルの方々と一緒に勉強する機会を提供してまいりました。

さて5回目を迎えた神奈川フットケア研究会は、群馬大学医学部皮膚科から永井弥生先生、埼玉医科大学形成外科から市岡滋先生のおふたりの先生をお招きしました。永井先生は日本皮膚科学会の「皮膚科の女性医師を考える会」の会員としてもご活躍中であり、永井先生には数多くの足の疾患の臨床像を提示していただきました。市岡先生には下肢切断を余儀なくされるような疾患において、複数の臨床科と複数のコメディカルスタッフのチームワークで如何にして切断を防ぐかをお話ししていただきました。

県皮膚科医会の会員の先生が80人、コメディカルの皆様は84人で、合計164人の参加があり、盛況のうちに終了しました。

(文責：山田裕道)

足の病変を読む 群馬大学医学部皮膚科准教授 永井弥生先生

末梢循環障害の症状としては、足趾の色調の変化、潰瘍、壊疽などがあります。原因として多いのは動脈の閉塞性病変に伴うもので、閉塞性動脈硬化症とバージャー病がよく知られています。近年では、この二つは末梢動脈閉塞症（PAD）としてまとめられることが多いのですが、両者の特徴、診断については知っておくべきでしょう。また、糖尿病に伴う足の病変は良く知られていますが、これは動脈硬化、微小血管障害とともに神経障害も関与して生じます。糖尿病性水疱、潰瘍、壊疽などのほか、多彩な皮膚病変が見られることがあります。

足は外力を受けやすい部位でもあります。高齢者の足は乾燥して容易にひび割れ、傷を生じやすい状態にあるので、日頃からスキンケアは大切です。また、足白癬のような真菌感染症は日常ありふれた疾患ですが、正確な診断の上での治療が必要です。細菌による二次感染から、時に重篤な病態を引き起こすことがあります。

足の潰瘍には、ときに様々な疾患が隠れています。潰瘍だけでなく、その他の所見も捉えて病変を読みます。重要な疾患の診断契機となる所見を見逃さないためには、足の病変を的確に捉える必要があります。鑑別すべき疾患や足の褥瘡も含めて解説します。

難治性潰瘍治療の実際—消毒から手術まで— 埼玉医科大学 形成外科教授 市岡 滋先生

高齢化、生活習慣病の蔓延により褥瘡をはじめ、下肢切断を余儀なくされるような糖尿病性足病変、血行障害による下肢切断など「治りにくいキズ」が増加している状況がある。このような治りにくいキズを慢性創傷または難治性潰瘍と呼ぶ。患者数の増加により専門外の医師や看護師もこれらに遭遇し、適切に対処しなければならない場面が明らかに増えている。とくに下肢を切断から救うlimb salvageには全身の管理、血行再建、創傷ケア、潰瘍治療、感染症コントロールなどが包括的に要求され、関与する部門は循環器科、血管外科、糖尿病内科、腎臓内科、形成外科、整形外科、皮膚科、リハビリテーション科など多岐にわたる。看護師、義肢装具士、糖尿病療養指導士、血管診療技師などコメディカルおよび医療産業界のコラボレーションも必須である。近年発展の著しい再生医療が臨床実地に生かされる重要な場ともなっており、きわめて高度で広範囲なチーム医療を必要とする分野である。本講演ではそのgateとなる難治性潰瘍治療の実際について基本から最先端までを紹介する。

編集委員会だより

河原由恵

今年度から編集委員長を川口博史先生より私、河原が引き継ぐことになりました。委員会メンバーの一員としてすでに参加しておりましたが、委員長の仕事は想像していた以上に多岐にわたるものでした。しかし、メンバーの先生方にも助けていただき、学生時代の同人誌活動（と比べたら失礼?!）よろしく楽しく仕事をしています。至らぬ点が多々あると思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

委員会の活動は例年どおり、企画を考える第1回委員会を平成23年1月27日に開催、校正やまとめをする第2回委員会を5月19日に予定しております。新しいメンバーも迎え、より一層の誌面充実をはかるべく活動していきたいと思っています。またお忙しい中原稿を執筆してくださった先生方、どうもありがとうございました。

産業医委員会だより

宋 寅傑

産業医委員会では、平成22年度も、前年度から始まった電子会議（メンバーが実際に集合して会議を行う形式ではなく、各人の職場や自宅にてeメールを使って議事や意見のやりとりを行う会議形式）にて委員会を開催いたしました。今回は通算で第11回の産業医委員会となります。平成22年度は7月の医会副会長と副幹事長の変更に伴って、オブザーバーが一部変更となりましたので、委員会開催前に昨年度に引き続き、IT委員会委員長の浅井先生にお願いして委員とオブザーバーのメーリングリストを更新していただき（浅井先生御自身も今期より当委員会オブザーバーとなりました）、平成22年12月4日に新しいメーリングリスト宛てに副委員長の宋より議事を送信して、電子会議を開始いたしました。今回も前回同様、議事はそう複雑なものではなく、下記内容の議事を委員とオブザーバーの先生方に御確認いただきました。

1) 平成22年7月決定の委員会委員およびオブザーバーについて

今期は、委員には変更は無く、オブザーバーのみが一部変更となりました。

委員長代行：鎌田英明

副委員長：宋 寅傑

委員：足立 真・尾見徳弥・栗原誠一・黒澤傳枝・齋藤蓉子・新関寛二・日野治子・平松正浩・吉田秀也

オブザーバー：増田智栄子・浅井俊弥・川口博史（以上敬称略）

2) 平成21年度“春の勉強会”の報告(詳細は“神皮”第17号41～43ページに掲載)

勉強会タイトル：神皮“春の勉強会”

※産業医委員会勉強会としては第4回勉強会

開催日時：平成22年3月25日(木) 午後7時より

会場：ホテルキャメロットジャパン(横浜市西区北幸1-11-3)

演題名：“皮膚は興奮しやすい器官である—皮膚は語る心の秘密—”

演者：クリニックおぐら院長 小倉 清先生

座長：関東中央病院皮膚科部長 日野治子先生

共催：神奈川県皮膚科医会 サノフィ・アベンティス株式会社

出席者数：40名

3) 平成22年度の産業医委員会勉強会について

平成22年12月時点では、下記の内容までが決定しているという状況でした。

勉強会タイトル：神皮“春の勉強会”

※産業医委員会勉強会としては第5回勉強会

開催日時：平成23年3月19日(土) 午後5時より

会場：横浜ベイシェラトンホテル&タワーズ(横浜市西区北幸1-3-23)

演題名：(未定)

演者：中村・平井・田邊法律事務所弁護士、田邊皮膚科外科院長 田邊 昇 先生

座長：(未定)

共催：神奈川県皮膚科医会 サノフィ・アベンティス株式会社

4) 平成23年度の産業医委員会勉強会について

第6回となる平成23年度の産業医委員会勉強会について、開催時期、講演演者、演題のテーマなどに関し、委員ならびにオブザーバーの先生方に意見を求めました。

12月以降、委員ならびにオブザーバーの間で意見のやりとりがeメールにて行われ、3月19日の“春の勉強会”に関しては、田邊先生より演題名決定の御連絡もいただいて、演題名は『産業医のための法的リスクマネジメント—皮膚科を中心として—』と決まり、座長：関東労災病院皮膚科部長 足立 真先生、開会の御挨拶：川口博史先生、情報交換会進行役：黒澤傳枝先生などの役割分担も決定いたしました。ただ、4)の第6回勉強会に関しては、具体的な案が固まらないまま、平成23年3月を迎えました。

次に、予定されていた“春の勉強会”についてですが、御案内後の段階で送付551名中155名からの返信があり、そのうち44名の先生方より出席予定の返信をいただいております。ところが、勉強会開催8日前の3月11日午後2時46分に突如、あの東日本大震災が勃発し、平和な社会を大混乱に落とし入れました。大震災の後、多くの会合、勉強会、学会等が相次いで中止されたことはご存じの通りですが、当委員会企画の“春の勉強会”も、電力不足で節電が叫ばれ、連日余震が続く中、3月14日に“中止”という辛い決定がなされました。勉強会中止の連絡は幹事と委員会委員・オブザーバー宛てには即日宋がeメールにて行い、さらにサノフィ・アベンティスより出席予定の先生宛てに個別に中止の通知を行っていただきました。勉強会予定の日(3月19日)は、サノフィ・アベンティスの担当の方が会場に待機して、誤って来場された先生の対応に当たってくださるとの連絡を受けていたので、この日、宋も確認のため午後4時半に会場に参りました。横浜駅は、節電のためにエスカレーターの一部を止め、照明を出来る限り落として営業しておりました。会場の横浜ベイシェラトンでは、ホテル入り口の掲示板にこの日の勉強会が中止された旨が表示されており、会場の4階ではサノフィ・アベンティスの担当の方が勉強会中止の旨を掲示して、待機しておられました。自分は早々に会場より退出いたしま

したが、同社担当の方はその後午後6時まで会場に残ってくださったということであり、後日伺ったところでは、誤って会場に来られた先生が、2名いらっしゃったとのことでした。サノフィ・アベンティスの誠意ある対応には深く感謝を申し上げる次第です。

今回の勉強会は誠に残念ながら中止と決まりましたが、次回の勉強会につきましては、これから検討し、第6回勉強会として平成23年度に開催させていただく予定です。当面、年に1回の委員会開催と勉強会開催をその活動内容としている産業医委員会ですが、今後とも、産業医委員会を、何卒よろしく願い申し上げます。

以上

委員会報告

広報委員会だより

小林誠一郎

2010年度「皮膚の日」行事報告 こばやし皮膚科クリニック 小林誠一郎

11月12日は、いい皮膚の日として記念日協会に登録され、医師を中心に皮膚に関する啓蒙活動を続けております。その一環として、今年も11月3日（水）に情報文化センター 情文ホールで、イベントを開催しました。

日 時：平成22年11月3日（水）午後2時～3時半

会 場：情報文化センター 情文ホール

プログラム

司会：齋藤典充先生（北里大学病院）

開会のご挨拶 神奈川県皮膚科医会 幹事長 鎌田英明先生

講演 「よくわかる水虫の予防と治療」 横浜市立市民病院皮膚科部長 毛利忍先生

足白癬だけでなく白癬疾患全般と予防までについてお話ししていただきました。

皮膚のトラブルQ&Aコーナー

イベント応募時に書いていただいた「皮膚科医への質問」について、司会の齋藤典充先生が以下の先生方に質問をして、答えていただきました。

担当の先生方：栗原誠一先生・望月明子先生・高須博先生・蒲原毅先生

閉会のご挨拶 神奈川県皮膚科医会 会長 栗原誠一先生

製品展示・紹介コーナーでの見学会

ホワイトで展示されているスキンケア製品の商品説明・スキンケア製品のサンプリングに、大勢のお客様が熱心に説明を聞き、大盛況でした。昨年同様、無料肌年齢コーナーも希望者が多く盛況でした。

「お肌のトラブル相談コーナー」では2部構成で行いました。

相談医の先生方：川上民裕先生、大林寛人先生、宮本秀明先生、澤田俊一先生、松井潔先生、宮川俊一先生、浅井俊弥先生、河原由恵先生、杉田泰之先生、渡辺知雄先生

参加者数

参加人数 239名

相談者数 29名

協賛 展示・おみやげサンプリングメーカー（8社）

アクセヌ株式会社 大島椿株式会社 ダイワボウノイ株式会社 常盤薬品工業株式会社 株式会社ポーラファルマ マルホ株式会社 日本ロレアル株式会社 ミヨシ石鹸株式会社

賛助・労務提供メーカー（26社）

ロゼット株式会社 エーザイ株式会社 MSD株式会社 大塚製薬株式会社 科研製薬株式会社 ガルデルマ株式会社 グラクソ・スミスクライン株式会社 グラファラボラトリーズ株式会社 佐藤製薬 協和発酵キリン株式会社 サノフィ・アベンティス株式会社 塩野義製薬株式会社 大正富山医薬品株式会社 第一三共株式会社 大日本住友製薬株式会社 大鵬薬品工業株式会社 田辺三菱製薬株式会社 株式会社ツムラ 鳥居薬品株式会社 日本ベーリンガーインゲルハイム株式会社 ノバルティスファーマ株式会社 バイエル薬品インテンドス事業部 藤永製薬株式会社 株式会社ポーラファルマ マルホ株式会社 ヤンセンファーマ株式会社

イベント案内掲載

神奈川新聞

本年も昨年と同じ情文ホールにて行いました。11月3日は休日であり、文化的なことを行うにはちょうど好都合であり、また、開業・病院・大学とすべて施設共通の休日のため皆様が参加可能であろうと思われま。今回も外注はなしとして、運営委員と御協力いただける先生方と労務提供の方々のお力で、盛況となることができました。ありがとうございました。次年度も祝日の11月3日に同じ情文ホールにて行う予定です。できるだけ多くの先生方にもご参加いただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

委員会報告

IT委員会だより

浅井俊弥

東日本大震災の1週間後、TVの報道を見ていると、避難した透析患者の相談窓口である、日本透析医会の連絡先がテロップに流れた。日本糖尿病学会も被災地でインスリン入手可能な医療機関を公表した。医師会からは、死体検案医の募集を呼びかけるFAXが届く。しかし……。皮膚科開業医として、何ができるかを考えた時、慢性の皮膚疾患で主治医と離れて避難した患者に対して、外用剤の供給をするのがよいかと、神奈川県内の避難所のひとつに連絡を試みた。避難所には主に福島原発事故の避難勧告に応じた100人弱の避難者が居て、そのうち10数名が透析患者とのことであったが、皮膚病で困っている人は今のところいないとのこと。必

要なら、神奈川県皮膚科医会へ、神奈川県医師会の分科会だから、神奈川県医師会に連絡をしてほしいと告げたが、その後の連絡はないようだ。

そんな中でも皮膚科開業医の日常は続く。帰国するのでたくさん薬がほしいというchinaの患者。AGAやシミを気にして来院する患者。それって、必要？どーでもいいだろうと、つい冷たく接してしまう。皮膚科医の力をどうやって発揮したらよいのか、自問自答の日々で、仕事に気合いが入らない。

さて、話は変わってITの話である。厚労省のレセプト電子化推進の流れは昨年中も会員に伝えてきた

が、それに加えて、昨年10月からは院外処方箋に医療機関番号の記載が義務づけられた。実は、これは、今年4月から行われる、院外処方箋との突合、3カ月間のレセプト縦覧へとつながっていた。無論、返戻が増えることが予想されるが、結局、誰のための電子化かと、考えてしまう。IT委員会はHPの更新とMLの管理が主な仕事で、小林誠一郎先生が手伝ってくれることになったが、委員長の不徳の致すところで活動は沈滞している。今さら、電子カルテの品評会も流行らないし、スマートフォンの医療分野への活用も時期尚早のようだ。何か、委員会にしてほしい、あるいは、するべきだということがあれば、アイデアを寄せていただければ幸いである。



函館にて

委員会報告

企画委員会だより

木花 光

本日の第136回例会はいかがだったでしょうか。担当幹事の河原由恵先生は当初「好中球と皮膚」というテーマをお考えだったのですが、さらに魅力的なテーマが見つかったと「妊娠と皮膚」になりました。お気づきと思いますが、今回はテーマにふさわしく演者、座長が全て女性です。例会が始まって以来の快挙だと思います。企画委員会でも、Joy Dermaに対抗してダンイDermaを作らないといけない時代になったとの声もありました。

今後の例会のテーマとして、第137回（平成23年12月4日）が「これから皮膚科医の生きる道」、第138回（平成24年3月4日）が「高齢者の皮膚疾患」、第139回（平成24年7月1日）が「帯状疱疹」を予定しています。乞う、ご期待。その時にこういうことについても話して欲しいということがありましたら、企画委員に連絡してください。

企画委員として永らく活躍していただいた東海大の松山孝先生は、平成23年4月より八王子に転勤のため、代わりに田宮紫穂先生をお迎えすることになりました。また、第135回例会「湿疹、皮膚炎群 “ずっとステロイドを塗っていいの？”」で抜群の集客能力を発揮された清佳浩先生にも企画委員になっていただくことにしました。

こんなご時世ですが、当会では3年先の例会まで協賛メーカーが決まっています。ありがたいことです。（99歳の日野原重明先生も、3年先まで講演予定が詰まっているそうですが。）今後もお出席よろしくお願ひします。若い先生も誘ってください。

健保委員会だより

井上奈津彦

平成22年度に神奈川県皮膚科医会健保委員会は下記の委員会を開催しました。

◎第1回健保委員会 平成22年6月30日(2010年)

- 議題：①健保Q & Aの回答の検討
②日臨皮健保担当委員の変更に関して
③診療報酬改定への要望に関して
④その他 審査上の問題点に関して

◎第2回健保委員会 平成22年12月1日(2010年)

- 議題：①健保Q & Aの回答の検討
②社保・国保および審査員間の審査基準乖離の解消に
関して
③その他 審査上の問題点に関して

◎第3回健保委員会 平成23年3月2日(2011年)

- 議題：①健保Q & Aの回答の検討
②社保・国保および審査員間の審査基準乖離の解消に関して
③4月から縦覧点検、突合審査が始まることに関して
④その他 審査上の問題点に関して



平成22年度健保委員会にて。増田智栄子先生、健保審査委員10年勤続のお祝い